

第12回
「優秀会社史賞」選考報告書

2000年10月25日

「優秀会社史賞」選考委員会

「優秀会社史賞」選考委員会事務

財団法人 日本経営史研究所

〒102-0093 千代田区平河町2-12-4 (ふじビル3F)

TEL 03-3262-1090 FAX 03-3239-5090

(無断転載を禁じます)

頒価 1,000円

目 次

第12回「優秀会社史賞」選考委員会	1
第12回「優秀会社史賞」候補作品	2
第12回「優秀会社史賞」入賞作品	3
第12回「優秀会社史賞」選考報告	5
入賞作品選評	13
候補作品選評	23
「優秀会社史賞」入賞作品（第1～第11回）	39

第12回（2000年）「優秀会社史賞」選考委員会

（敬称略，50音順）

委員長	経営史学会顧問	森川英正
委員	立教大学経済学部教授	老川慶喜
	東京大学社会科学研究所教授	橘川武郎
	京都産業大学経営学部教授	柴孝夫
	埼玉大学経済学部教授	大東英祐
	東京経済大学経営学部助教授	中村青志
	法政大学経営学部教授	橋本寿朗
	青山学院大学経営学部教授	長谷川信
	大阪大学経済学部教授	宮本又郎
	東海学園大学教授	山崎広明
	神戸大学経済経営研究所教授	吉原英樹

主催 財団法人日本経営史研究所

協賛 財団法人経済広報センター

事務局 財団法人日本経営史研究所

第12回「優秀会社史賞」候補作品

(会社名50音順)

『宇部興産創業百年史』	宇部興産株式会社
『住友銀行百年史』	株式会社住友銀行
『住友倉庫百年史』	株式会社住友倉庫
『住友林業社史』上巻 『住友林業社史』下巻 『住友林業社史』別巻	住友林業株式会社
『続々三菱銀行史』	株式会社東京三菱銀行
『東武鉄道百年史』 『東武鉄道百年史 資料編』	東武鉄道株式会社
『三菱製紙百年史』 『三菱製紙百年史 資料編』	三菱製紙株式会社
『山一証券の百年』	山一証券株式会社
『山口銀行史』 『山口銀行史 資料編』	株式会社山口銀行
『ワコール50年史 ひと』 『ワコール50年史 こと』 『ワコール50年史 もの』 『ワコール50年史 資料集』	株式会社ワコール
『抱えきれない夢 - 渡辺プロ・グループ四〇年史 -』	財団法人渡辺音楽文化フォーラム

第12回「優秀会社史賞」入賞作品

(会社名, 50音順)

優秀会社史賞

『住友林業社史』上巻 『住友林業社史』下巻 『住友林業社史』別巻	住友林業株式会社
『三菱製紙百年史』 『三菱製紙百年史 資料編』	三菱製紙株式会社

優秀会社史賞 特別賞

『山一証券の百年』	山一証券株式会社
『抱えきれない夢 - 渡辺プロ・グループ四〇年史 -』	財団法人渡辺音楽文化フォーラム

第12回「優秀会社史賞」選考報告

1. 選考の経過

2. 総 評

1. 選考の経過

第12回「優秀会社史賞」は、1998年4月から2000年3月までの期間に刊行され、財団法人日本経営史研究所経営史料センターで収集することのできた社史を対象として、選考を行った。

会社史の収集は、専門図書館協議会関東地区協議会と日本経営史研究所とが共同編集している「会社史・経済団体史総合目録 追録」(年2回発行)41~43号に基づいて行った。第12回「優秀会社史賞」選考に当たって収集することのできた社史は、延べ274冊であった。

選考は、候補作品を10作品前後に絞り込むための第1次選考と、絞り込まれた候補作品のなかから優秀会社史賞入賞作を選ぶ、本選考の2段階に分けて行った。

第1次選考は4月から6月初めにかけて行われ、選考結果に問題点等のコメントを付して、本選考の選考委員に提出した。第1次選考のメンバーは、つぎのとおりである。

飯田 隆 (法政大学経済学部教授)
内田 金生 (拓殖大学経営学部講師)
佐々木 聡 (明治大学経営学部教授)
田付 茉莉子 (恵泉女学園大学人文学部教授・日本経営史研究所)
平井 岳哉 (千葉経済大学経営学部講師)

第1次選考の選考結果を受けて、6月22日(木)、本選考委員会第1回会合を開き、別掲のとおり候補作品11点を決定した。あわせて各作品につき、それぞれ3名の選考委員を精読担当者とするよう分担を決め、さらに3名のなかから1名を選評担当者と決定した。

なおこの際、優秀会社史賞と特別賞の選考基準について確認が行われるとともに、従来選考の対象としなかった団体史について、今後も同様に対象としないか

どうかについて議論が行われ、事務局の作品収集・管理能力の限界を主な理由とし、また会社史に対して団体史を明確に位置づけることも容易でないこと等を考えて、従来どおり会社史だけを選考の対象とすることにした。

9月17日(日)午後1時から全国町村会館会議室において最終選考委員会を開催し、選考委員が持ち寄った作品ごとの選考メモに基づいて検討を行い、4時間余の議論を経て入賞作品を決定した。

2. 総 評

第12回「優秀会社史賞」の選考に当たり、またもや選考委員会の委員長を仰せつかることになった。じつに5回目の委員長である。委員長としてこの総評を執筆するのも、当然の話、5回目である。いささかマンネリズムの感じがないでもない。

しかし、マンネリだからといって、今回の選考基準を従来のそれとガラリと変えてしまうわけにはいかない。目先を変えるために、私に代わった人物を委員長に選ぶのは簡単だとしても、長年選考基準はどうあるべきかについて議論を尽くしてきた選考委員の了解を得ないで、社史賞の選び方を一新するわけにはいかない。

社史賞の選考基準は、つぎの3つである。

1. 豊富な社内資料の利用、つまり公開
2. 会社の歴史プロセスの的確な記述・説明
3. 読者をひきつける魅力と「読ませる工夫」

この選考基準に対し、一部に批判の声が聞こえることはうかがい知っている。それは、会社の実状に無知な学者の意見だというものである。会社史は会社の都合によって、会社の必要を満たすために刊行するもので、学者の研究史料として役立つ目的などもっていない。優秀会社史賞の選考基準は、学者の目からみて、学者の意見にかなうかどうか重点がおかれており、よろしくない。

こういう意見が一部にあることは知っているが、選考基準が学者本位につくられたというのは説得的でない。会社史が学者の利益などにいっさい関係なく、会社の必要から刊行される出版物だとしても、それがすぐれた質をもつものであると評価されるためには、上記の3つの基準にかなっていないなければならないと思う。会社は作品の高低など気にしないで、会社の都合で会社史をつくるのだと言われるなら、それはそれでけっこうだが、それなら「優秀会社史賞」なんかやめてしまえという結論になりかねない。話はぜんぜん別な方向に飛んでしまう。

また、口先ではどう言おうと、会社史の出来栄を評価されて喜ばない会社はない。なんであれ、作品をつくる苦勞は作品の出来栄をほめられることによ

て報われる。会社史にしても変わらない。優秀会社史賞の意義を、この機会にあらためて見直してみるのも悪くはない。

ただ、往年に比べ、選考委員のメンバーが大学教授ばかりで固まってしまったことは、反省する必要があるかもしれない。往年は、経済団体連合会事務局員、ジャーナリスト、大学教授でも企業体験を積んだ人が、全体としては少数であっても加わっていた。といて、わざわざ今日のように大学教授一色にしたわけではない。結局、何百ページ、ときには千ページに近い社史を何冊も読み通す苦痛に、時間的余裕にあまり恵まれない職業のかたがたは耐えられず、委員を辞退し、後任も容易に決まらなかったというのが実状である。

それにしても、選考委員にもっとバラエティーをもたせるための努力が足りなかったと、選考委員長として反省している次第である。

さて、第12回「優秀会社史賞」はミレニアムの年に、ということは20世紀の最後の年に贈られる記念すべき賞である。対象は1998、1999両年度に刊行された会社史で、財団法人日本経営史研究所経営史料センターが収集しえたものである。その点数は、274点にのぼる。ちなみに第8回が332点、第9回が247点、第10回が230点、第11回が339点であった。前回に比べると減少したが、この10年間の平均(284点)にほぼ等しい。

選考は「選考の経過」にみられるとおり、第1次選考と本選考の2段階に分けて実施された。同じく「選考の経過」に記載されている5名の第1次選考委員が2000年6月1日、各人の選考結果を持ち寄り、12の本選候補作品を決定した。

12作品のなかには、本書に選評がのっている11作品のうち『山一証券の百年』は入っていなかった。その代わり、本選考の候補に挙げなかった『国立国会図書館五十年史 本編』および『経済団体連合会五十年史』が加わっていた。この2作品を本選考の候補作品からはずして『山一証券の百年』を加えた責任は、本選考委員会にある。

本選考委員会の第1回会合は、2000年6月22日に開催された。委員一人ひとりの氏名は本報告書に示してある。

6月22日の第1回会合では、まず第1に、会社史でない『国立国会図書館五十年史 本編』、『経済団体連合会五十年史』をつぎの理由に基づき「優秀会社史賞」

の対象にしないこと、したがって両書の本選考の候補作から除くことを決めた。両書を候補に挙げるとすれば、大学史、省庁史、業種別団体史をも選考対象とし、候補作として検討する必要がある。その結果、膨大な対象を取り扱うことが必要となり、また評価基準を従来のもの以上に的確にする必要が生じて、選考委員会・事務局ともに対応が不可能であるというのが理由であった。

第2に『山一証券の百年』は候補作品に値するのではないかとの意見が出され、討議の結果、全員一致で本選考の候補とすることに決定した。同書は、第1次選考の前段階において、事務局によって本格的社史ではない「読み物」として判断され、第1次選考の対象から外されていた。しかし、『山一証券の百年』は、本格的社史として『山一証券の百年』の刊行をも準備していたところ、山一証券の事情によって普及版のみの刊行とせざるをえなかったものであること、倒産会社が倒産直後に普及版としてではあれ「社史」を刊行した例はなく、独特の情報価値を有する可能性があること、これらの要因を考慮のうえ、あえて第1次選考委員会を飛び越して、本選考の候補作品として審査することに決めたものである。

こうして、本選考の候補作品は全11点、選考委員は11名、1点を3名ずつの委員が精読し（ということは1名の委員が3点ずつ読む）、その後3名の意見を集約して受賞作品を決定すること、受賞作品は例年どおり、本賞もしくは特別賞とすること、3名のうち1名が代表して候補作品の選評を書くが、11名の委員全員が1作品ずつ選評を執筆することを決定した。

こうして、11名の委員が1人3点の候補作品の審査に取りかかった。いつも記すことだが、候補に挙がってくる会社史は大冊のものが多く、それを読みこなす時期は猛暑の7、8月である。

苦心の審査結果を持ち寄って、本選考委員が第2回の委員会に臨んだのは9月17日。委員間の討議の結果、つぎの優秀作品が決定した。

『住友林業社史』上・下・別巻

『三菱製紙百年史』同『資料編』

以上2点には第12回「優秀会社史賞」が贈呈されるが、このほかに特別賞として次の2点選ばれた。

『山一証券の百年』

『抱えきれない夢－渡辺プロ・グループ四〇年史－』

渡辺プロ・グループは、いわゆる「ナベプロ」である。山一証券の悲劇は、どなたもお忘れではあるまい。とにかく、まことに異色の社史が特別賞を受けることになった。

以上の4点を選び出す過程における選考委員の発言は、そのまま記録しておきたいくらいに興味深く、有意義なものであった。その一端はそれぞれの作品に対する選評から読み取っていただきたい。

日本企業が今後21世紀の荒波に揺さぶられるなかで、会社史のあり方もさまざまに変化していくことであろう。しかし、後世に企業戦力として役立つ社史をつくるという「社史づくり」の使命は変わることなく継続することであろう。あえて声を大にして言いたい。「社史づくりに幸あれ!!!」

(森川英正)



入賞作品選評

『住友林業社史』上・下・別巻

『三菱製紙百年史』同『資料編』

『山一証券の百年』

『抱えきれない夢

— 渡辺プロ・グループ四〇年史—』

優秀会社史賞

『住友林業社史』上・下・別巻

住友林業株式会社社史編纂委員会編纂

住友林業株式会社発行

1999年2月 273p, 452p, 182p 27cm

本書は、住友林業株式会社の50周年を記念して編纂されたものである。しかし、同社の事業は、住友の根幹事業であった別子銅山と密接な関係をもって興ったため、本書では江戸時代以来4世紀以上に及ぶ住友の林業の歴史が記述対象となっている。

上巻では江戸時代の別子の林業から、戦前の住友林業所の事業までが記述されている。別子における林業は、銅山の坑木や製錬用の木炭を供給する鉱山備林として興ったが、銅山の発展とともに酷使によって疲弊し、幕末には植林事業が始められるにいたった。明治維新後は、鉱山備林としての意義を徐々に減じたが、今度は長年にわたる乱伐によって荒廃した山林の回復が伊庭貞剛らによって唱えられて、大規模な森林復元計画が策定される。さらに大正期にいたり総理事鈴木馬左也は林業への本格的進出を決断、農商務省の山林担当官吏であった村田重治を住友に迎える。大正10年、住友合資設立とともに、林業課は林業所に昇格、以後、別子だけではなく、事業は北海道・九州から海外へと発展した。

この上巻の3部は、住友史を熟知する住友史料館の4人の研究員によって執筆されただけに、さすがに重厚な仕上がりとなっている。第一次資料を駆使して分析が進められており、江戸時代の産銅経費の推移など学術的にも貴重な情報が豊富に盛り込まれている。林業をとおして、また異なる側面の別子の歴史を知ることができた。明治以降については政府の鉱山・山林政策との関係などの記述のほか、別子の自然を取り戻すため始まった大造林計画の経緯が克明に描かれているのがよいし、鈴木と村田のコンビの人的関係など、本格的林業経営の開始のプロセスが、歴史的流れに沿ってうまく整理されている。

これに対して、下巻は第二次世界大戦後を対象としている。1948年2月、財閥解体によって住友の山林事業は海外の山林を失ったうえ、6社に分割された。6

社のうち、四国林業は自立する能力をもっていたが、地域的に細分化された他の5社は経営不振に陥り、3回にわたる合併を経て再統合され、1955年2月、住友林業株式会社が成立した。住友林業は国内木材の生産・販売だけではなく、海外木材資源の開発・輸入、合板・新建材の生産・販売へと多角化を進め、1973年の第一次石油危機以降には、木造軸組構法による注文住宅事業に本格的に進出し、事業内容を再構築した。

下巻は住友林業内部の編纂委員によって執筆されて、上巻とおのずから文体、叙述のスタイルを異にしており、やや平板のきらいもあるが、読みやすく書かれている。戦後、6社に分割され、さらにそれが住友林業1社に統合されていく過程や、財閥解体や農地改革に対する住友の関わり方、対応などが興味深く描かれていること、戦後の政府の林業政策の推移やそれがもたらした影響について相応の記述があり、また日本の木材業界における物流、商流の変化がこれまた要領よく説明されていること、事業の重心を、国内木材の生産、販売、輸入木材の販売、製材・建材の販売、住宅事業へと移してきた過程をうまく説明していること、などが評価された。

別巻は、江戸時代以来の別子の山林に関する史料や訓示類、社内統計のほか、日本の林業全体に関する史料や統計も収録し、利用価値が高い。

上巻については、史料原典の言葉や歴史学用語がそのまま使われるなど、一般の読者にはやや読みづらいこと、下巻については、全体的な業績についての評価や意思決定過程の記述がもっと欲しかったという意見もあった。しかし、総じていえば、本書は第一次資料を駆使して編纂された実証密度の高いオーソドックスな社史であるうえ、林業という業界ではじめての本格的社史であり、日本の林業の歴史や林業政策を知るうえで、情報価値が高いと評価された。これらが優秀会社史賞に選定された大きな理由である。

(宮本又郎)

優秀会社史賞

『三菱製紙百年史』同『資料編』

財団法人日本経営史研究所編集

三菱製紙株式会社発行

1999年6月 726p, 272p 26cm

1998年に百周年を迎えた三菱製紙は、これまでに『三菱製紙株式会社六十年史』、『三菱製紙七十年史』、『更上一層樓』などの既刊社史がある。ただし、『三菱製紙百年史』は既刊社史のダイジェストではなく、新たな資料収集に基づいて本格的な百年史を編纂することが目的であった。『三菱製紙百年史』は10章からなり、総ページ数からみても新たな百年史を編纂するに十分な条件があったといえよう。

本書を概観すると、おおむね高い実証性に裏打ちされた叙述が行われ、資料の利用、分析内容ともに一定の水準を超えているのが受賞の理由として挙げられる。

資料については、『三菱製紙株式会社六十年史』に利用された一次資料が失われたという限界はあったものの、会社創立に関する一次資料の発掘、岩崎家への報告に用いられたとされる『事業報告書』の利用など、努力の跡がみられる。また、記述には注がつけられており、社内資料を含めて資料の出典が明記され、資料の開示が行われている。

データの利用という点では、豊富な図表が用いられている。データに基づいた実証性という点では、戦前期については事業報告書を典拠とした表が多く使われている。むしろ不必要なほどの大きさの表が掲載されている。

全般的な感想としては、百年史として新たな視点からそれぞれの章が記述されている。たとえば、三菱製紙は三菱財閥ではなく岩崎家の事業であること、「三菱合資・岩崎家との関係」が人事労務管理、財務状況について詳しく分析されている(第2章)。

戦後高度成長期を扱う第6章では、1957年に成立した白石社長体制のもとで「経営戦略の始動」がみられたという。ここでは、戦前期について「三菱家の家業であるという特徴から、もともと本社体制が30人規模ときわめて手薄であった。経営は事実上、事務系および技術系のそれぞれ1名の常務役員によって運営され

ており、経営者養成のためのキャリアパスも存在していなかった」と、専門経営者層の手薄さを指摘したうえで、「資金調達や経営情報の入手にあたっては、三菱合資会社に全面的に依存し、業界としての付き合いもほとんどなかったと言ってよい」。したがって、財閥解体は三菱製紙に他社よりも大きなダメージを与えたという興味深い指摘をしている。

ただし、分担執筆である本書は、筆者によって企業活動への関心のあり方が異なり、章によって分析の重点に差異がある。第6章で指摘された本社体制、資金調達、経営情報の入手の特徴などについて、それが戦間期の第3章において触れられているかと思えば、まったくといってよいほど触れられておらず、トップマネジメントの構成や意思決定のあり方については具体的な分析が乏しい。わずかに、「積極的に新規事業を進めていた木村久寿弥太が20年1月三菱合資業務に専念するため退任し、代わって慎重な経営姿勢をとる田原豊が会長に就任したことによる面も大きかった」と述べているが、本来、より詳細に分析すべきところであろう。分担執筆の場合にありがちなことではあるが、本書には統一されたコンセプトを読み取りにくい感があるのは残念である。

さらに、全般的に、組織についての説明が少ないことも指摘できる。とくに、戦後になって、成長戦略がある程度成功を収め、一貫メーカーへの飛躍が実現したことにより、経営組織、経営管理の問題は生じなかったのであろうか。たとえば、三菱の場合、事業所を利益計算の単位とする「場所」制度の伝統があったが、三菱製紙の場合はどうであったのか。また、成長戦略のなかでどのように変化したのであろうか。ややないものねだりの感があるが、興味深いところであろう。

以上のように、本書は、社史賞の選考基準である、①豊富な社内資料の利用、つまり公開、②会社の歴史プロセスの的確な記述・説明という点で水準を上回った内容になっている。ただし、③読者をひきつける魅力と「読ませる工夫」という点では、章によってばらつきがあり、統一されたコンセプトに欠ける面があるといえよう。

(長谷川 信)

優秀会社史賞 特別賞

『山一証券の百年』

山一証券株式会社社史編纂委員会編集

山一証券株式会社発行

1998年11月 462p 20cm

本書は破綻企業が出版した類に希なる社史である。今までにも、消滅した会社に関係した社史が刊行された事例はかなりある。しかし、経営破綻をした企業が発行主体となって、しかも、自己の破綻の状況をも含み込んだ社史を刊行した事例は、少なくとも評者の知るかぎりではない。

とって、本書がはじめから破綻企業の社史として書かれたわけではない。同社の発行主体である山一証券は、少なくとも表面的に健全な経営状況の時に創業百年を記念するために、百年史の刊行を思い立った。その際、同社は社史として「本史・資料編・普及版」の3点を刊行することを決定したという。それは、同社が廃業することになる5年前であった。以後、鋭意、その編集作業が行われたが、1997年11月に山一証券は自主廃業を決め、企業活動を停止した。それに伴い、社史の編集も休止されたが、かろうじて普及版だけが没却の淵から救い出され、陽の目を見ることになった。それが本書である。

こうした経緯をもって刊行された本書であるが、ここからもわかるように本書はけっして破綻企業がつくった社史ではない。その点は留意しておく必要がある。もし、破綻企業がつくった社史であるならば、当然書かれるべきみずからの破綻原因についてのなんらかの解釈や、破綻を結果として、それ以前の歴史についても行われるべき評価がなされてしかるべきであるが、本書にはそれはみられない。たとえば、周知のように同社は1965年に一度は経営破綻を露呈し、日銀特融によってかろうじて危機を免れた経験があるが、しかし、本書では、その経験がなぜその後の経営に生かされなかったのか、なぜ再建の中心となった人びとが自分達が退いた後の経営の担い手を健全に生み出すメカニズムを作れなかったのであろうか、という問題が分析されていないし、また「にぎり」や「とぼし」という、同社を致命的な状態に追いやることになった事態が進展している時期の記述が、

あたかもなんらの問題ももたらさなかったかのようになされている。

これは、本書が本来そのような視覚からつくられたものでないことによる。それを書き換えなかったことについては、議論もありえる。しかし本書の冒頭には、「創業百年にして廃業せざるを得なかった真因を解明・記述したかったが、時間的に困難であり、また山一の現在置かれている立場等を考慮し、断念せざるを得なかった」と記されている。その問題はもとより刊行に携わった人びとの了知することであったといつてよい。これに続けて、編纂者は、「すべての判断は後世の歴史に委ねたい」と書いているが、この言葉のなかに、何も知らされずに歴史を刻まなければならなかった人びとの思いと無念を感じ取ることができる。

その分析の代わりに、本書では、山一証券が破綻の原因についてみずから調査した「社内調査報告書」を巻末に掲載している。これはきわめて意義深いものである。ここで語られているのは、いかに最高経営者達が責任を回避するだけに終始したのか、また、監督官庁がいかに無責任に振るまっていたのか、そして、企業がそうした無責任の狭間に陥った時には、いかにもろいものであるのか、という事実である。極論すれば、本書の価値は、この報告書を広く公刊し、そして、まさに歴史に残した事にあるのかもしれない。

本書は、あくまで普及版としてつくられた書物である。したがって、図表は最小限に絞り込まれているし、踏み込んだ分析は控えられている。かつて、山一は1958年にきわめて浩瀚な『山一証券史』を刊行している。同書は、日本証券業史としても、また、当時の社史としても、非常に評価の高い書物であった。その水準に挑戦した本格的な百年史が、ほとんど完成していたということは、本書でも記されている。多分、普及版として作られた本書のところどころで、読む人が感じるさまざまな疑問の多くは、その本史においてある説明が与えられているのであろう。それが公刊されえない状況になったことは、まことに残念な思いがする。

普及版は本来は社史賞の対象とはならない。しかし、本史の公刊が望まれえない状況のなかで、困難な事態を乗り越えて、ともかく破綻会社の破綻への道筋をまとめ、しかも社内の調査報告書を掲載することで、破綻の原因についての歴史的な記録を残したことにおいて、本書は特別賞として選ばれることになった。

(柴 孝夫)

優秀会社史賞 特別賞

『抱えきれない夢 - 渡辺グループ四〇年史 -』

「渡辺プロ・グループ四〇年史」編纂委員会編纂

財団法人渡辺音楽文化フォーラム発行

1999年4月 402・80p 26cm

渡辺プロダクション（通称「ナベプロ」）の活動を抜きに、戦後日本のエンターテインメント・ビジネスの歴史を語ることはできない。本書は、1955年1月に渡辺晋・美佐夫妻（結婚は同年3月）が社長・副社長となって設立した渡辺プロダクションを中心とする、渡辺グループの40年の歩みを記録したものである。

本書に対して、オーソドックスな社史としての不十分性を指摘することは、難しいことではない。財務諸表や組織図がない、計数化されたデータに乏しい、等々の批判がそれである。しかし、本書には、そのような批判を無力にしまうほどの魅力がある。

第1の魅力は、世界的にも珍しい芸能プロダクションというビジネスモデルが現実化されていくプロセスが、戦後日本のエンターテインメントの流れと関連づけて、いきいきと描かれていることである。この新しいビジネスモデルの本質はプロデュース機能をあわせもつタレント・マネジメントにあるが、渡辺プロは、音楽流行の予見、近代的な人事管理、自前の作曲家チームの編成、ツアー・ネットワークの確立、企業の協業的グループ化などによって、この分野におけるパイオニアとなり、「ミュージック・エンターテインメント最大のソース」(96ページ)となった。渡辺プロの活動は、エンターテインメント・ビジネスをめぐる法的環境の整備や取引条件の公正化、業界の社会的地位の改善にまで及んだ。この点に関連して興味深いのは、渡辺プロと競合関係にあるものも含めて、当事者の多くが、日本のエンターテインメント・ビジネス全体に対する同プロの貢献を高く評価していることである。全体的にみれば、世界でも稀有な芸能プロダクションの企業史を記録するという本書の企図は、十分に達成されているといえる。

第2の魅力は、とくに本書の前段の部分において、新しいビジネスモデルを構築するうえで発揮された渡辺晋・美佐という2つの強烈な個性の役割が、臨場感

あふれるタッチで叙述されていることである。2人は、必ずしも、一心同体だったわけではない。両者のあいだには、「晋の“組織化”重視と、美佐の“近代化”重視」という差異があり、それが「晋の慎重派、美佐の行動派というイメージ」につながった(95ページ)。「戦後の青春」(第一章)を共有した2人は、互いに補い合いながら、「潮流を捉え」(第二章)、「ニュー・イメージ」(第三章)を膨らませながら、渡辺プロ・グループの骨格(第四章)を構築していったのである。

とはいえ、本書に問題がないわけではない。ここでは、2つの点を指摘しておく。

第1の問題は、1980年代から90年代にかけて進行した日本のエンターテインメント・ビジネスにおける渡辺グループのウェートの後退が、十分には描かれていないことである。タレント・マネージャー間の新しい関係やCDの登場による状況変化など、ヒントとなりそうな要因について言及はなされているが、本書を読むかぎりでは、渡辺グループは、それらに適切に対応したかのようなようである。それでは、なぜウェートの後退が生じたのだろうか。

第2の問題は、前述した「第2の魅力」の裏返しに当たる点であるが、渡辺夫妻に関する個人的記述が、本書の後段の部分ではやや冗長に感じられることである。この種の記述は、新しいビジネスモデルを構築する過程を取り扱った前段の部分では魅力的であるが、「功成り名を遂げた」のちの時期を対象とした後段の部分では印象が変わるのである。

(橋川武郎)

候補作品選評

『宇部興産創業百年史』

『住友銀行百年史』

『住友倉庫百年史』

『続々三菱銀行史』

『東武鉄道百年史』同『資料編』

『山口銀行史』同『資料編』

『ワコール50年史 ひと』同『こと』

同『もの』同『資料集』

候補作品

『宇部興産創業百年史』

百年史編纂委員会編纂

宇部興産株式会社発行

1998年6月 913p 27cm

最近の宇部興産は、連結決算のセグメント情報として、その事業分野を化学、建設資材、機械・金属、その他（オーストラリアからの石炭輸入の事業とその他の新規事業等）の4つに区分して開示している。これらの事業分野は、1897年6月に渡辺祐策を中心に宇部市に設立された匿名組合「沖の山炭鉱」を起点として、同市およびその近隣において発展した機械、セメント、化学工業の4つの企業とその事業領域にほぼ対応している。石炭資源に限りがあるので、石炭を基礎として各種の工業を起こすことによって、地域経済の永続的な発展を確保すべきであるとの信念に基づいて、渡辺はこれらの事業を起こしたのであった。宇部興産は、1942年3月に、戦時の経済統制政策に対応するために、これらの諸企業・事業を継承することによって設立された。このように宇部興産は合併により、4つの異業種による複合経営体として成立したが、その後今日までの間に、各事業分野ともその具体的な内容はじつに大きな変化を経験している。

この社史のメリットは、これらの事業分野の変遷について、石炭産業の発展と衰退、石油化学工業の勃興、自動車産業の興隆など、宇部の地域経済の動向や日本の産業界の全般的な動向などを視野に入れながら、きわめてわかりやすく解説されていることにある。これだけ多様で性格の異なる諸事業分野における事業展開を、一般の読者にも理解できるように解説するためには、産業・経済事業についての幅広い知識をもつだけでは足りず、適切な統計データやグラフ等にも細やかな工夫を施さねばならない。なにぶんにも百年間の多岐にわたる事業活動の歴史であるから記述すべきことが多く、個々の問題の解説が深みに欠ける傾向があるものの、この社史には執筆者の力量と編集者の努力が感じられる。

第2のメリットは、宇部式匿名組合という形態で、地域社会に根ざして創業した企業がやがて、地方企業の枠を超えて成長し、全国規模の企業となり、さらに

は世界的を目指すようになる過程がたどれることであろう。この問題のために特定の項目を設けてはいないが、株式会社への転換、株式の公募や株主の地域分布の変遷、社債の発行と第一銀行との関係、三和銀行や日本興業銀行との関係の成立、株式市場への上場、協調融資方式の始まり、海外からの資金調達活動など、資金調達や財務に関する説明をたどると、その成長過程の大筋を把握できる。

このように本社史は、内容豊富で優れているが、やや物足りない点もある。第1に、事業活動の変遷は良く描かれているが、企業経営の実態がみえにくい。宇部興産は、合併によって成立した異業種の複合経営体であるので、複雑で困難な経営問題が発生することが避けがたいと思われる。労務管理面では、比較的最近まで、事業分野ごとにそれぞれの伝統的な方式が踏襲され、あえて統一は試みなかったとされるが、他の職能分野ではどのような状況だったのであるか。前身の4社は株主や経営者が重複し、沖の山炭鉱の石炭を燃料や原料として相互に結びついており、合併には固有の合理性があったとされているが、敗戦直後には集排法の指定を受け、合併前の4社への分割を前提として組織や人事を運営した時期もあったという。企業は法的には合併しても、経営の実態としてはなかなか融合せず、合併効果が出ない場合も少なくない。分割の危機を乗り越えた求心力や多角的に事業を展開している宇部興産の企業全体としての経営実態に関する説明が欲しかった。20世紀後半の日本の経済・社会の歴史は激動の連続で、そうした環境変化に対処するため、トップがどのような認識のもとにどのような方針を立て、経営諸資源を各事業分野にどのように配分したのだろうか。事業部制の採用など全社組織の変遷に関する説明はあるが、戦略的な経営問題に関する意思決定の過程について具体的な説明が少ないのが惜しまれるのである。

第2に、製品のほとんどが産業資材であるためか、マーケティングに関する説明が弱い。しかし、ナイロン樹脂などのエンジニアリング・プラスチックは、ユーザーの用途開発を支援する技術サービスが欠かせないし、後発で参入した石油化学の諸製品については先発企業にどのようにして対抗するかといった問題があったであろう。たとえば、ABS樹脂の用途開発やポリプロピレン樹脂の自動車向用途開発の過程は、研究開発とマーケティング活動の接点とでもいべき性格を持ち、多くの興味深い物語があったのではないだろうか。（大東英祐）

候補作品

『住友銀行百年史』

住友銀行史編纂委員会編纂
株式会社住友銀行発行
1998年8月 897p 27cm

これまでに住友銀行は多数の社史を刊行し、その歴史を記録してきた。評価の高い作品もあり、なかでも『住友銀行史 昭和五十年代のあゆみ』（昭和60年）は、東洋工業の再建など苦闘の歴史をみごとに描いたことが高く評価され、第5回優秀会社史賞・特別賞を受賞した。今回の『住友銀行百年史』は昭和50年代以降の時期を主たる記述の対象期間としているが、創業以来の歴史を述べており、昭和54年に刊行された『住友銀行八十年史』以来の、いわば正史にあたると思われることができる。従来の同行史に比べると、背景の記述が圧縮されて、同行の経営活動に重点をおいて歴史が展開されており、読みやすい。また、回想録を利用したことが効果的であり、メリハリの利いた文章になっている点も評価された。図表を本文から除いたのも一つの工夫と評価することもできるが、それは同時に経営業績の分析が、いちじるしく手薄であるというマイナスの評価にもなりうる点でもある。

さて、叙述の内容をみると、現代的な関心、つまりコーポレートガバナンス構造への関心が読みとれる。常務取締役の合議制を制度化したこと、例規類纂、経理明細表、予算管理制度などによるリスク管理の整備が明らかにされて、伊藤万（イトマン）事件に関してはメインバンクとしての節目節目の行動が明記されているし、安宅産業問題についての記述からは、メインバンクの期中監視能力の限界がかなり明確に記述されている。また、大蔵省、日本銀行の金融行政と銀行行動、とくに合併をめぐる具体的指示とそれへの対応が、戦前における三和銀行との合併問題、占領期における銀行分割問題、河内銀行の合併問題などをとおして明確に述べられている点も評価された。そして、戦前の歴史に限られるとはいえ、桑港支店の開設、浅間山丸出張所の設置などの事例をとおして、個人の創意工夫が比較的良く取り上げられているのも新鮮な印象を与えている。

しかし、選考会議では、叙述の内容という点では高い評価を受けたポイントについて、もう少し立ち入った記述がほしかったという批判も提起された。たとえば、磯田頭取の役割をもう少し明確に書いてほしかったという声が強かったのである。また、たとえば、マッキンゼーに依頼した組織分析を経て組織改革が行われ、採用された総本部制については詳しい記述があるものの、マーケット別組織にして営業審査に切り替えた。これは審査、管理、チェックより、機動的な営業体制を構築することを目指したものと推測できるが、それを明確に記述していない。そして、バブルの終わりごろから総本部制が見直され始めて、バブル破綻後には審査の強化、チェック体制の整備が図られた。そうであれば、なぜ、総本部制の見直しが行われたのか、どのような問題点があったのかという記述が求められることになろう。そして、その間は、まさに磯田頭取の時代であったのである。

また、1980年代における途上国債権の不良化、住専問題に絡んで住宅ローンサービスとの関係、バブル期の銀行不祥事なども一応は指摘がある。しかし、とくに不祥事についてはイトマン事件などを含めて、個人的な例外的な出来事という位置付けになっている。つまり、不心得者がしでかしたことで銀行に内在的な要因はないが、そうした例外的な不心得者を生んで世間に迷惑をかけたことは反省しなければならない、という姿勢で取り上げられている。しかし、不祥事の発生前に支店業績評価法を変えたことなどからみれば、インセンティブ設計に問題があったことをうかがわせるから、その点への踏み込みがほしかったという意見もある。住友銀行は日本の銀行を代表する存在であり、『住友銀行史 昭和五十年代のあゆみ』が高い評価を得ているだけに、その水準を維持し、高める姿勢と努力が求められたということである。

(橋本寿朗)

候補作品

『住友倉庫百年史』

株式会社住友倉庫編纂

株式会社住友倉庫発行

2000年3月 921p 26cm

704ページの本文を読み終えて、最近の倉庫業の実態がよく理解できた。もはや、荷主の貨物を預かって保管料収入を得るだけのビジネスではない。広域総合物流業として、陸上・海上（コンテナ海運に伴う港運業務）・航空に、また、国内から海外へと広く展開している。倉庫業務のみをとってみても、工場製品の在庫管理、流通加工、トランクルーム等に多様化している。これらの実状は第6回「優秀会社史賞」を受賞した『三菱倉庫百年史』でも学ぶことができたが、同じ100年史でも本書は1899～1999年と三菱の1887～1987年よりも新しい時代を取り扱い、三菱と比べて戦後史にとくに重点をかけているだけに、より詳細であった。

しかし、社史の面白さは、業務の推移の詳しい説明だけでなく、業務における創意工夫を通じて会社が成長していく過程を描き出すことにある。この点で本書はもの足りず、面白味に欠けていた。その理由については、あとで述べる。

本書のメリットの1つとして、構成に幾つかの工夫が凝らしてあることが挙げられる。既刊社史『住友倉庫六十年史』の存在を考慮したからか、終戦までの序章と第1～第3章には131ページ、昭和30年までの第4章を加えると213ページとスペースを圧縮し、高度成長期以降に挙げて集中している。2つは、第4章以下各章（第8章を除く）の最後に「業績と経理」「経営体制と従業員」の2つの節を設け、当社のカネとヒトに関するマネジメントの状況を要約している。叙述は平板だが便利である。

さらにもう1つは、第7章「経済のグローバル化を踏まえた国際業務の拡充」で、平成11年までの当社の通史が記述され終わったのち、第9章「創業100周年を迎えて」の前に、思いがけない章が用意されているのである。第8章「倉庫土地開発による不動産事業の展開」がそれで、昭和46年から平成11年まで、28年間にわたって、当社の不動産事業が語られる。

これは新しい試みである。まんべんなく時代順に全社の歴史を章ごとに切っていくのではなく、とくに会社が戦略上の焦点として特定の事業の推移に1つの章をあて、これに存分の力を集中するという構成があってもよい。このユニークな構成、バブル以降の日本経営史を嵐の中に追い込んだ商品、これはおもしろそうだ。じつに私は真っ先にここから読みだしたのである。そして失望した。ここには全社収益に占める不動産収益のウェートが昭和52年から平成元年にかけて急増し、あとは停滞しているという表が紹介されているだけである。会社の財務・経理面まで含めて不動産事業の功罪はどうだったのか、住友不動産、住友銀行（イトマン）、住友商事等々バブル期に活躍した住友グループの不動産事業とどのような相互関係に立っていたのか、納得できる回答は与えられていない。

さきほど、本書は社史としての面白味に欠けると決めつけた。しかし、その理由を考えていくと、失礼な発言だったかもしれない。一般に護送船団産業の社史はおもしろくない。そして倉庫業も護送船団産業である。運輸省によって制定された法律のもとで、料金の公定をはじめとしてガンジガラメに規制されている。平成元年12月の通運事業法廃止と物流2法の制定により、物流業界は規制緩和の方向にあると本書はいうが、前途ほど遠い。倉庫業各社間で生死をかけた競争が起きるはずもなければ、イノベーションを期待することもできない。倉庫業の社史におもしろみを期待するほうが無理なのかもしれない。

わざわざ極論を例に引いていると批判されるかもしれないが、昭和62年以降に当社各支店が大規模物流センターに進出したプロセスが記述されている（540ページ以下）が、背景の説明において同センター建設に貢献したとして、日港協・港湾管理者・港運業者からなる出資法人、低利資金、民活資金を提供する政府関係機関、利子補給を行う（財）港湾近代化基金の名前が立ち並ぶ。要するに、運輸省の天下りたちが牛耳る特殊法人のオンパレードである。こういう儀礼のために私企業の社史が用いられるとしたら、情けない話である。

本書は、荷主、海運会社、ゼネコン各社等との取引の模様にも筆を費やしている。護送船団の枠の内部だけしかのぞけないわけではない。しかし、表面的な記述に終わっても足りない。また、同業他社との比較をもう少ししてほしかった。業界における当社の地位、特色を示すために必要だったと思われる。（森川英正）

候補作品

『東武鉄道百年史』同『資料編』

東武鉄道株式会社社史編纂室編纂

東武鉄道株式会社発行

1998年9月 1108p, 472p 27cm

東武鉄道株式会社は1964年に『東武鉄道六十五年史』を刊行している。同書は総頁数1013頁の名著で、そのうち通史には667頁ほどがあげられているが、「鉄道事業」、「軌道・鋼索鉄道・架空索道事業」、「自動車輸送事業」、「付帯事業」、「沿線開発」、「経営状態」、「組織・機構」、「教育・福利・厚生」という部門別の構成をとっており、各部門間の相互連関のうゑに東武鉄道の経営活動の歴史を描くという視点は、まったく欠落していた。

『東武鉄道百年史』も本文1103頁の名著で、ほかに472頁の資料編が刊行されている。資料編は、財務諸表・輸送統計・保有車両の変遷などのデータと詳しい年表を収録し、充実したものとなっている。本編は3部構成をとっており、第1部「経営基盤構築の時代」は設立時（前史も含む）から敗戦時まで、第2部「近代化とイノベーション」は戦後復興期から石油危機まで、そして第3部「経営新時代を迎えて」では石油危機から現在までが扱われている。こうした構成は、頁数の配分も含めてほぼ妥当であると思われる。

東武鉄道沿線の地域経済の状況については、田山花袋・森鷗外・永井荷風ら文学者の作品を利用しながら、興味深く叙述されている。しかし、それも東武鉄道の経営とのかかわりで記述されていないので、本書を社史として読む読者はややとまどいを感じるのではなかろうか。根津嘉一郎をはじめとする経営者や本間英一郎などの技術者についてかなりページを割いており、東武鉄道が総武鉄道社長の本間英一郎が構想し、原六郎の人脈で発起人が集められて設立されたこと、根津嘉一郎は九鉄改革事件で末延道成と知り合い、それが東武鉄道の経営にかかわっていく契機となったこと、また東武鉄道の経営者と総武鉄道の経営者が同様の人脈でつながっていることなど、興味深い事実が明らかにされた。国有化以後における東武鉄道と国鉄との運賃値下げ競争などについての叙述も興味深い。

しかし、本書には①利用されている1次資料のほとんど先行研究からの孫引きである、②社内の経営資料が『営業報告書』など一部を除くとほとんど利用されていない、という決定的な問題点がある。たとえば、『鉄道局（庁）年報』『鉄道院年報』『鉄道院鉄道統計資料』などの鉄道統計や『鉄道時報』『東京経済雑誌』などの雑誌も資料として利用されているが、先行研究からの孫引きであるため、特定年月日のものしか利用されていない。その結果、『鉄道局（庁）年報』には各鉄道の駅別品目別発着貨物数量の統計があるにもかかわらず、本書では系統的にはまったく利用されない。社史編纂に取り組む姿勢がやや安易と言われても仕方がない。関東大震災についても被害状況のみが問題とされ、それがその後の東武鉄道の事業展開にいかなる影響を与えたかという視点からの言及はまったくみられない。434ページには東武鉄道の「重役会決議録」の写真が掲載されているが、本書のなかで「重役会決議録」をはじめ社内の経営資料が使われた形跡がほとんどみられない。したがって、東武鉄道の経営に関する興味深い問題、すなわち①東武鉄道と日本鉄道・総武鉄道の合併問題、②東武鉄道が国有化されなかった理由、③根津財閥の性格などについてもあまり踏み込んだ検討はなされていない。

このような問題は、戦後の経営を扱った第2部および第3部ではさらに大きな欠点となって現れているように思われる。社内の経営資料がほとんど利用されていないので、意思決定のプロセスや経営組織の変遷などがほとんど明らかにされていない。第3部では、営業収支や貸借対照表についての検討もほとんどなされていない。戦後の東武鉄道の流通業や不動産業などへの進出が同業他社よりも遅れた理由についても、鉄道業に主眼をおいていたという経営方針に求めているが、説明すべきは東武鉄道がなぜそうした経営方針をとるにいたったかであるように思われる。総じて、本書の執筆者には東武鉄道の経営を記述するという姿勢に乏しく、本書から東武鉄道がいかなる企業であったかを読みとることはできなかった、というのが審査員のほぼ一致した評価であった。

最後になるが、「読みやすさ」を考慮するのであれば、地名にルビをふったり、地図も位置関係がその土地に不案内な読者にもわかるように作図するなどの工夫が欲しかった。

(老川慶喜)

候補作品

『続々三菱銀行史』

東京三菱銀行企画部銀行史編纂チーム編纂
株式会社三菱総合研究所発行
1999年11月 845p 26cm

三菱銀行は、今回刊行の『続々三菱銀行史』以前に、行史を二度刊行している。最初が、昭和29年刊の『三菱銀行史』である。同書は、三菱為替店時代、第一百九国立銀行時代などの前史の時代も対象に含み、また三菱銀行については、明治28年に発足する三菱合資会社銀行部時代（大正8年まで）を含め、昭和28年までを対象としている。記述のスタイルは、各時期の経済や金融界の一般動向を述べたうえで、当該時期の三菱銀行の行動を、預金・貸出・収益などの数字を中心に追い、ついで店舗・職制・役員の変化を記述するというものであった。現時点で三菱銀行の歴史を創業期まで振り返って理解しようとする、残念ながらきわめて物足りない内容であることは否めない。しかし、同書の内容は、当時の銀行史一般の水準を示すものであったともいえよう。

ついで、昭和55年刊の『続三菱銀行史』は、『三菱銀行史』が扱った後の昭和28年から54年までを対象期間とした。同書でも、日本経済の動向や金融情勢などのマクロ的事象の記述にかなりの紙幅が割かれたため、三菱銀行史としての掘下げは十分とはいえなかった。ただ、「第二編 主要施策史」では、昭和30年代以降の日本経済の高度成長のもとでの三菱銀行業務内容の拡大・発展の様相を、「大衆化路線の展開」、「国際業務の展開」、「事務合理化の進展」の3テーマの機能別分野史のスタイルで、ダイナミックに描こうとする工夫がなされた。

今回刊行の『続々三菱銀行史』は、『続三菱銀行史』のあとを受け、昭和54年から始まり、平成8年4月1日の合併による東京三菱銀行発足までを対象時期としている。つまり、三菱銀行の行史刊行は、一貫して時期的な続編刊行主義をとっている。

本書が対象とするのは17年間であり、一般の社史の対象期間と比べると、かなり短い。しかしながら、昭和50年代以降は、日本経済の成熟化と国際化の進展の

なかで、有力都市銀行の業務が急速に多様化・高度化・国際化していった時期であり、さらにバブル経済とその破綻も含めて、銀行経営をめぐる環境の変化はきわめて大きく、かつ急速であった。それだけに記述しなければならない事柄も多く、17年間であっても、本文記述は500ページ近くに及んでおり、内容は盛り沢山である。

本書によれば、三菱銀行では3年を1期とする「長期計画」が策定されてきたようである。本書の構成も、それぞれの「長期計画」の内容を説明し、新たに就任したトップの打ち出す方針によってそれを補足することを通じて、経営方針を説明するという基本スタイルが全編を貫いている。ただし、こうした計画が、具体的にいかなる結果ないし成果に結びついたかが十分に叙述されていない場合が多い。これも対象期間が短い行史の限界なのであろうか。また、銀行間の競争状況やそれに対する三菱銀行の政策決定過程に関する記述などは手薄だと感じられる。

総じて大手銀行史は読みやすいとはいえない。とりわけ激動の時期の多くの事柄を内容に盛り込んだ本書の場合、この時期を本格的に対象とした銀行史のパイオニアワークたらんとした編纂執筆者の意気込みは理解できるが、決して読みやすいものではなく、読者は消化不良になりがちである。本文中に理解を助けるための表やグラフがほとんどないのも不親切であろう。

すでに述べたように、三菱銀行では、これまでに100年史のように、あらためて明治の創業時にさかのぼった行史を編纂するという作業がなされていない。そういう意味で、3度の行史は時期的には接続していても、1つの統一あるいは一貫した視点で、創業から最近にいたる同行の軌跡をとらえることがなされていないことは残念である。既刊の行史刊行後に、当該時期の三菱財閥関係資料が発掘された場合もあろうし、あらためて対象時期を創業期までさかのぼった大河ドラマともいべき行史が編纂されることを強く望みたい。

(中村青志)

候補作品

『山口銀行史』同『資料編』

株式会社山口銀行銀行史編纂委員会編纂

株式会社山口銀行発行

1999年6月 993 p, 481 p 27cm

山口銀行は、昭和19年3月31日に山口県下にあった百十銀行・宇部銀行・船城銀行・華浦銀行・大島銀行という5つの銀行が国策に従い大同合併して設立されたが、その中心となった百十銀行の前身である第百十銀行の創立（明治11年11月25日）から数えると、平成10年11月に120年の歳月を閲していた。本書はこの創立120周年を機に、行員が先人の事跡に学ぶことによって今後の経営の発展に役立てること、先輩元役職員が往時を回顧するためのよすがとなること、取引先に銀行の考え方や実績、地域経済と銀行とのかかわりについて理解を深めてもらうことを目的として発刊されたものである。

本書は序章、第1～第8章、終章の10章から成るが、まず序章で「近年の金融経済情勢を昭和初期の情勢と対比し、前身銀行の金融恐慌への対処を顧みることにはきわめて今日的意義がある」という考え方のもとに「昭和の金融恐慌と山口県下の銀行」、「百十銀行と株式会社鈴木商店およびその関連会社の取引」、「金融恐慌の影響と反省」、「銀行法の制定と県内銀行の合併」、「戦時体制への動きと地方銀行の経営」について記述している。この部分は金融恐慌以降、戦時期にいたるまでの山口県銀行史、鈴木商店破綻史の地域版として出色の出来栄をもったものとして評価できる。

ついで本論である第1～第8章のうち第1章は山口銀行の創立を扱っており、この部分の記述は、地方銀行史として標準的である。第2章から第8章までの諸章は、昭和20年度から平成9年度までの52年間で7つの時期に区分して、いずれも第1節で日本経済と山口県経済について略述し、第2節以下でそのような環境下での山口銀行の経営について述べるという構成をとっている。地域経済→銀行の経営という構成も、地方銀行の経営が一定の地域経済環境を前提として営まれている以上、十分にうなずける手法である。そして、銀行の経営としては、各章

ほぼ共通して（もちろん、それぞれの時期に応じて一部の出入りはあるが）役員構成、店舗配置、長期計画、組織、預金、融資、外国為替、国際関係、業績、事務合理化、機械化、人事制度、福利厚生、労働組合等を扱っている。時期区分とこれらの項目をマトリックスにして、この2つが組み合わせてできるそれぞれの箱を埋めていくと全体ができるという仕掛けであり、これらによって52年間の銀行の活動の全体像をつかむことができるようになるはずであるから、この構成も上記の目的から銀行の活動の全体の姿を正確にとらえようとする以上、オーソドックスな手法である。そして本書の記述は、前身銀行から数えると120年に及ぶ銀行の歴史を正確に記録として残し、行員が先人の事跡に学び、先輩元役職員が往時を回顧するよすがとするという刊行の目的を、それなりに達成していると評価できる。とくに行員が自分の担当業務を拾い、時の流れに沿って読んでいけば、本書の利用価値は大きいであろう。

会社史賞選考委員会では、本書が昭和43年刊行の既刊行史をよく見直して、修正・補足・新資料発掘の努力を行っている、店舗展開に関して顧客の要望・動向との関係などを書き込んでいる、貸出行動についても独自の創意工夫を記述している、審査体制との関係でバブル期における与信管理の強化について記述している、制度金融の活用について詳しく記述している、業績についても地銀平均と当行との比較を行う等工夫を凝らしていることなどが、メリットとして挙げられた。

しかし他方で、本書全体の流れが読み取りにくい、全体の説明が多岐にわたり、散漫な印象を免れがたい、外的環境の変化と当行の方針や活動との関連が「一体的」に理解できるほどクリアーに記述されていない、住専問題についてはそうとうにつこんで記述されているが、その後の不良債権問題については958ページに3つの表が掲げられているだけで、貸出や業績などとこれがどのように関連しているかの分析がほとんど行われていない等の問題点が指摘された。

本書に盛られた内容を前提として、より読みやすいすぐれた社史をつくるには、各章ごとに中心となるテーマをみつけ、それに焦点を絞って記述すること、そのうえで全体についてある種の流れができるような工夫を凝らすという作業が必要となるであろう。

（山崎広明）

候補作品

『ワコール50年史 ひと 相互信頼』同『こと 女性美追求』同『もの からだ文化』同『資料集』

株式会社ワコール社長室社史編纂事務局編纂
株式会社ワコール発行

1999年11月 310p, 410p, 314p, 112p 27cm

本社史は、『ひと 相互信頼』『こと 女性美追求』『もの からだ文化』の3分冊および『資料集』からできている。

ワコールは、創業者の塚本幸一（故人）がつくりあげた戦後派企業である。そのため、同社の経営の歴史は、塚本幸一を抜きにしては語るができない。第1分冊の『ひと』では、塚本幸一の生い立ちから、戦争体験、創業のころのこと、企業の成長・発展への取り組み、財界活動や文化活動のこと、そして家庭人としての塚本幸一と、塚本幸一の生涯が記述されている。塚本幸一の生涯が劇的な要素を多く含んでおり、また文章が物語めであるために、読みやすい。塚本幸一の生涯を読むことによって、ワコールがどのようにして生まれ、成長発展してきたかを知ることができる。

女性用下着のトップ企業であるワコールが、どのようにして生まれ、成長発展してきたかを、経営戦略、生産・販売・調達などの業務活動、国際経営、そして、人事・財務・情報管理などについてくわしく記述したのが『こと』の分冊である。通常の意味の社史は、この『こと』であるといえるかもしれない。

『もの』の分冊は『からだ文化』のタイトルのもと、ワコールの商品、広告宣伝、キャンペーン、シンボルマークなどの変遷を明らかにしている。この『もの』を読むことによって、日本における女性用下着の変化発展の歴史を、そのときどきの社会やライフスタイルの変化のなかで知ることができる。貴重な資料である。

『資料集』は、経営理念、定款、組織、役員、業績、財務諸表、子会社・関係会社、従業員数、歴史（年表）などを明らかにしている。

本社史は、ワコールの誕生からこんにちまでの成長発展の歴史を、創業者の塚本幸一の生涯を軸にわかりやすく記述しており、なかなかすぐれた社史である。

しかし、本社史はつぎのような問題点のため、残念ながら入賞の選からもれた。

1つの問題点は、3分冊という構成の問題点である。第1分冊と思われる『ひと』を読んだ後につづけて第2分冊の『こと』を読むと、重複が目立つ。とくに第1章がそうで、読み進む意欲をそがれる。

第2の問題点は、書いてほしいこと、知りたいことがかならずしも十分に記述されていないことである。「十年一節50年計画」の内容がよくわからない（『こと』第1章）。1980年代は利益が長期に低迷しているが、この理由が説明されていない（同第3章）。欧米での事業の不振とアジアにおける事業の好調は対照的であり、興味深いのが、なぜこうなのかを知りたい（同第5章）。新旧社長の間で経営方針やブランド戦略をめぐる軋轢があったといわれていたが、この点もこの社史ではかんたんにふれられているだけであり（『ひと』278ページ、『こと』326ページ）、もの足りない。

ワコールは一般には塚本幸一がつくりあげた企業とされているが、じつは、その塚本の補佐役として重要な役割を果たした人物がいる。中村伊一である。塚本が対外的な経営戦略に注力したのと対照的に、中村は内部的な体制固めに手腕を発揮した。本田技研工業の本田宗一郎と藤沢武夫のコンビに似ているともいえる。本社史でも、中村のことは記述されているが、塚本との関係や役割分担などを、もっとくわしく記述してほしい。

第3の問題点は、執筆の姿勢である。塚本幸一の生涯を述べた『ひと』では、もっぱら塚本の陽の側面が記述され、陰の側面の記述が不足している。そのため、陰影にとほしい出世物語、英雄物語のようになってしまったのは惜まれる。

『こと』の第4章のタイトルは「拡大化戦略」となっている。ところが、この章が扱う1980年代は、売上げこそ伸びたが、利益は減少している。このことは、本社史できちんと記述されている（『こと』224ページ）。この章のタイトルは、たとえば「長期低迷の時代」などとすべきではなかったか。

じつは、このタイトルのつけ方に、本社史の姿勢が出ているのではないかと思われる。問題点、挫折、対立、失敗、見こみちがいなど、ワコールの経営の陰の側面を、もうすこしていねいに記述していたら、同社の成功や成長発展の陽の側面がいつそう引き立ち、リアリズムのすぐれた社史になっていたのにと、残念である。
(吉原英樹)

第1～第11回

「優秀会社史賞」入賞作品

(会社名, 50音順)

第1回 (1978年)

優秀会社史賞

- 『大塚製靴百年史』同『資料』1976年1月, 1976年3月 775p, 360p
『住友信託銀行五十年史』同『別巻』1976年3月 1309p, 222p
『第一法規出版株式会社七十年史』1973年10月 586p
『第四銀行百年史』1974年5月 986p
『東レ50年史』1977年6月 542p
『創業 100年史』(古河鋳業) 1976年3月 768p
『三菱鋳業社史』(三菱鋳業セメント) 1976年6月 1063p
『安田保善社とその関係事業史』1974年6月 984p

優秀会社史賞 特別賞

- 『荒川林産百年史』(荒川林産化学工業) 1977年4月 492p
『渋沢倉庫の80年』(I) (II) 1977年3月 382p, 371p
『蔦進 日本車輛80年のあゆみ』(日本車輛製造) 1977年5月 462p
『日本陶器七十年史』1974年12月 624p
『三井銀行 100年のあゆみ』1976年7月 337p

第2回 (1980年)

優秀会社史賞

- 『鹿児島銀行百年史』1980年2月 1155p
『グンゼ株式会社八十年史』1978年11月 1054p
『日揮五十年史』1979年3月 600p
『創業百年史』(広島銀行) 1979年8月 1121p

優秀会社史賞 特別賞

- 『株式会社新井清太郎商店九十年史』1979年11月 661p
『カゴメ八十年史』1978年11月 632p

第3回 (1982年)

優秀会社史賞

- 『東京海上火災保険株式会社百年史』上・下巻 1979年8月, 1982年3月 775p, 1033p

- 『富士銀行百年史』同『別巻』1982年3月 1400p, 537p
『創業百年史』(北越銀行) 1980年9月 1039p

優秀会社史賞 特別賞

- 『世界へのあゆみ トヨタ自販30年史』同『資料』(トヨタ自動車販売)
1980年12月 612p, 214p
『ブリヂストンタイヤ五十年史』同『資料』1982年3月 532p, 78p
『明治生命百年史』1981年7月 405p

第4回 (1984年)

優秀会社史賞

- 『西部瓦斯株式会社史』同『資料編』1982年12月 807p, 182p
『住友化学工業株式会社史』1981年10月 782p
『武田二百年史』同『資料編』(武田薬品工業) 1983年5月 1145p, 739p
『中國銀行五十年史』1983年4月 1097p
『日本興業銀行七十五年史』同『別冊』1982年3月 1204p, 461p

優秀会社史賞 特別賞

- 『而至六十年史』(而至齒科工業) 1983年1月 745p
『さわやか25年 東京コカ・コーラボトリング株式会社 社史』1983年2月 249p
『三井両替商』(三井銀行) 1983年7月 502p

第5回 (1986年)

優秀会社史賞

- 『中安閑一伝』(宇部興産) 1984年10月 896p
『創業百年史』同『資料編』(大阪商船三井船舶) 1985年7月 863p, 300p
『東急建設の二十五年史』同『資料編』1985年10月 640p, 453p
『阪神電気鉄道八十年史』1985年4月 627p
『琉球銀行三十五年史』1985年3月 816p

優秀会社史賞 特別賞

- 『住友銀行史 昭和五十年代のあゆみ』1985年11月 381p
『三菱重工名古屋航空機製作所二十五年史』1983年12月 722p

第6回(1988年)

優秀会社史賞

- 『伊予鉄道百年史』1987年4月 1129p
『関西地方電気事業百年史』1987年4月 999p
『百年史 東洋紡』上・下巻 1986年5月 574p, 652p
『三菱倉庫百年史』同『編年誌・資料』1988年3月 721p, 315p
『めんづくり味づくり 明星食品30年の歩み』1986年10月 657p

優秀会社史賞 特別賞

- 『創造限りなく トヨタ自動車50年史』同『資料編』1987年11月 1030p, 321p

第7回(1990年)

優秀会社史賞

- 『朝日生命百年史』上・下巻 1990年3月 989p, 1008p
『東京製綱百年史』1989年4月 720p
『日本アイ・ビー・エム50年史』別冊『コンピューター発達史-I BMを中心にして』
『情報処理産業年表』1988年10月 575p, 307p, 363p

優秀会社史賞 特別賞

- 『創造への挑戦 豊田合成40年史』1990年3月 400p
『日本郵船株式会社百年史』同『資料』別冊『近代日本海運生成史料』
1988年10月 901p, 919p, 588p

第8回(1992年)

優秀会社史賞

- 『味をたがやす 味の素八十年史』1990年7月 767p
『住友別子鉱山史』(住友金属鉱山)上・下・別巻 1991年5月 505p, 438p, 271p
『セゾンの歴史』上・下巻『セゾンの活動 年表・資料集』
1991年4月, 1991年6月, 1991年11月 458p, 647p, 636p
『日本生命百年史』上・下巻, 同『資料編』1992年3月 773p, 654p, 639p

優秀会社史賞 特別賞

- 『セーレン百年史 新たな飛躍・新たな挑戦』1990年11月 737p

第9回(1994年)

優秀会社史賞

- 『花王史100年 1890~1990』同『年表/資料』1993年3月 905p, 285p
『プロミス30年史 草創』同『飛躍』同『革新』同『資料・年表』同『付編』
1994年2月 399p, 460p, 753p, 159p, 170p
『丸の内百年のあゆみ 三菱地所社史』上・下巻, 同『資料・年表・索引』1993年3月
565p, 729p, 590p

第10回(1996年)

優秀会社史賞

- 『呉羽化学五十年史』1995年4月 511p
『サッポロビール120年史』1996年3月 1009p
『住友海上火災保険株式会社百年史』1995年1月 1004p
『大気社80年史 環境づくりの記録』同『写真集』1994年10月, 1993年5月 629p, 191p
『中部地方電気事業史』上・下巻(中部電力)1995年3月 452p, 433p

優秀会社史賞 特別賞

- 『朝日新聞社史 明治編』同『大正・昭和戦前編』同『昭和戦後編』同『資料編』
1995年7月 640p, 682p, 926p, 686p

第11回(1998年)

優秀会社史賞

- 『東京銀行史』同『資料編』1997年12月 787p, 145p
『東レ70年史』同『資料編』1997年12月 1022p, 181p
『北陸地方電気事業史』(北陸電力)1998年3月 930p

優秀会社史賞 特別賞

- 『共同通信社50年史』同『年表』1996年6月 771p, 172p
『東洋経済新報社百年史』1996年9月 1124p